

西大寺東西兩塔跡の發掘

發掘の目的

西大寺は奈良時代の大伽藍で、流記實敗帳まで傳わらてて、もとも拘らず、當時の遺跡は殆ど残されておらず、現存する塔跡すら果して東塔の遺跡そのものか否かの確証も得られない程の有様で、伽藍の中紀縁すら明らかにし得ない実状であつた。今回の發掘の目的は、今は地上に土壇の片鱗すら残していなければ、西塔跡を發掘し、東塔基壇周辺の調査と相まって、出来れば東西兩塔土壇の旧位置をつきつめ、伽藍の中紀縁を出し、合わせて條坊の坪の中心を定め、平城京保拂研究の一資料とする事とあるのである。

發掘の經過

東塔の基壇を中心とする發掘は昭和十二年十二月に行つた。年の結果上壇は地山を稍深下げて、層狀に狭き圓の一定の高さに築いた所で礎石をすえ、更に礎石の間に土をつき固めてあり、其上の下端の地山との境には玉石を入れていてこれが判つたが、この玉石を入れた

礎石は基壇の外方にも十數尺抜つているのは何故か疑問を抱かせた。

今年三月にはこの土壇の下端の底泥から推して、西塔跡でも、同様な結果が現れるならば、例之基壇石等は全く失われていろにして、西塔跡の存在とその位置を窺み得るものが予想し、西塔跡とさへしていふ附近一帯を徹底的に發掘することとした。

最初先ず東塔の西方、田龍池院跡に数軒のトランチを入れたのであるが、田地泰がひどく荒されていて、状況がつかりないので、真等の散在している低い部分と、地山の高い部分との境を含む一帯の表土を一面に削ぎ落し、完全に塔上壇建立当初の表土或は地山を露出することとした。こうして繰くりをしてみると、地表の荒された状況も明

瞭となつたので、壇の築土と單なる地山との境を求めて行って来た所、北よりの部分にて遂にその境がつきづめ尋られ、それより東方は地山、西方では地山を稍切下げ、その上に玉石を並びてその間を粘土で充填していける状況が認められた。然し更にその境を掘詰けると、その境界線が斜行するので、築土の平面は八角形に有ることが判つた、よつて東塔の周辺でも八角形にならかと推してめた所、果してそうなり、兩塔一段したのである。但し西塔跡では東塔附近の粘土層であるとの裏切り、砂礫層となつていろいろ部分が多いので、地山が切下げられて築土されていたのは西北部分にすぎず、壇の境界の明らかにされたのはその部分にとどまり、他は玉石の存在によつてその部分が壇内であることが知られる程度に終つた。壇の南と西の端は築地外になり、土地が切下げられてはゐるので、壇端の究明は不可能であつた。

發 塔 結 果

東塔では四面について發標することが出来たので、八角土築の大きさを測定し得たが、その直径は約八尺、現塔基壇の一辺の大きさは約五五尺、兩塔の推定中心距離は二九・四尺で、奈良時代の尺にして三百尺と考之られる。

西大寺塔については寶龜十一年の資費帳に

塔ニ基 玉重各高十五丈

とあるが、現東塔礎石によつて知られる所の一边の長さは二七・四四尺であるから、其の

高さは十五丈程とすら書く、現存塔跡の規模はこれと一致する。然し護國寺本諸事縁起集に旧流記曰として「有八破^{ハシ}七重塔破壞^{ハシ}」とあり、日本靈異記には藤原永平が「西大寺の八角の塔を四角に成し、七層を五層に減す。この罪に由りて「地獄に落ちた話が載つて」とことからすると、最初は八角七重塔を作る計画で工事が進むられたことを思われる。今回発掘の墓壙の大きさから推定すると、八角七重塔の初層の徑は六丈足程であろうから、この塔が若し建つていたらその高さも三百尺を超えることとなつたであろう。何れにしても、東西相討させ八角七重塔の墓壙の存在が実証され、その結果現塔墓壙も亦創立當初の位置を保つてゐることが確証し得られたことは重要で、このようにして伽藍中軸線を明瞭にしようとする所期的目的も完全に達成し得られたのである。

出土 遺物

西塔墓壙外の旧地表は完全に失われてあり、遺物を当初の散在状態のまゝには残されていなかつたが、新古つきませて現在の凹所等に堆積していた。その改特に重要なものは、厚二分五厘位の三彩の陶器断片で、円形のものと角形のものとあり、針穴もあつて、走り地種と播種種の木口飾と推定されるもの(十六片)、博局断片二、その他丸瓦々当四十六、平瓦々当六十四、各七八種等が発見されている。尚東塔八角墓壙上塗膜^{ヒツモク}の中から和銅錢二個を見出だした。

